を　～ごちそうレシピをかこう～（６時間）

授業者：松下　裕幸

１　社会的背景（現状と課題）

文部科学省（2018）は，児童が学習の中で，対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，自覚を高めることが言葉による見方・考え方を働かせることであることを示し，それは，国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながることを指摘している。森川（2018）は，言葉の獲得について，幼児教育において獲得した言葉を使わせることが重要であり，言葉の自覚的・随意性を発達させる必要があることを指摘するとともに，「書き言葉」につながる遊びや生活が求められることを示唆している。一方で，言葉の自覚的・随意性を発達させることについて，生活的概念を科学的概念として発達させる話し言葉から書き言葉への発達が難しいと述べ，今日の作文指導は，「言葉は自然に獲得し，身についていくものである」という考えに拠っており，「話すように書けばよい」という指導がなされている課題を指摘している。また，幼稚園教育要領で示された経験上得た音声言語としての「言葉」を，小学校の段階において，自身の認識の変化を目的としての学びをするために，手段・道具としての言葉を認識し，その意味，働き，使い方を適用させることが求められていると述べている。このように，初等教育においては，幼児教育において獲得した言葉を，遊びや生活等を通じて，自覚的に捉えさせることが重要であると考えられる。

また，国立国語研究所（1977）は，動詞習得と構文習得との関連について検討した結果，就学前期には，話し言葉において，他動詞を用いながら「～が～を～する」の構文が使用できるようになることを示唆している。一方で，斉藤（2001）は，３歳から６歳後半の健常児計140名を対象に，独自に考案した構文テストを行い，６種の格助詞の表出の発達を調査した結果，「を格」は無生物に付く場合に，「お母さんがケーキ食べてる」のように省略が見られ，６歳後半でも獲得していたのは50％に過ぎなかったことを示した。また，神・野村（2002）は，小学校１・２年生を対象に，構文産出能力を調査した結果，特に１年生の男子において，主格「が格」と目的格「を格」の入れ替えが不可能な逆語順の場合，困難が生じることを示し，助詞方略が完全に身に付いていないことを指摘している。このように，就学前期には，話し言葉において，他動詞構文の使用が可能になるが，確実な習得は図られておらず，書き言葉における他動詞構文の適切な使用に困難が生じていると考えられる。これは，助詞を省略しても意が伝わる話し言葉から助詞を省略すると意が伝わらない書き言葉への発達の困難さといえる。伊藤（1996）は，「を格」は省略されやすく，「を格」が名詞ではなく，動詞と結びついているためであろうと述べている。「を格」伴わなければ，相手に正確に意を伝えることはできず（国立国語研究所，1977），小学１年生においては，他動詞の使用に応じた対象を表す「を格」の適切な使用が求められている。

国立国語研究所（1977）は，４から６歳児226名を対象に，発話における動詞習得と構文習得との関連を検討した結果，「～で～を～する」という構文や「モノを作る」ことに関した動詞は，まず，一般的な意味をもつ「作る」という動詞とともに，「～をつくる」，「～で～をつくる」という動詞句，あるいは「～が～をつくる」「～が～で～をつくる」という構文が習得され，動詞句と構文の使用を媒介して，次に，より分化された特殊な動詞「縫う」「編む」「建てる」が習得されることを示唆している。また，動詞の意味面の発達において，「～が～で～をつくる」という構文の場合，例えば，対象を示す「を格」のところに，いろいろな語（対象）を入れ，新たな文をつくることは，それらの語（対象）の特性に応じた分化した特殊な動詞を内的に準備することになり，新たな構文習得を準備する場合がありうると述べている（国立国語研究所，1977）。このように，動詞と構文は，相互に関連し合いながら習得されると考えられている。そのため，構文習得を図るためには，構文産出を通じて，一般的な動詞から特殊な動詞へと分化を図っていく必要があると考えられる。

２　本単元の「新たな価値を創造する力」につながる資質・能力

OECD（2019）は，リテラシーやニューメラシーのような発達の基盤の構築は，新たな価値を創造する力を含む変革をもたらすコンピテンシーの育成にも寄与することを示唆している。小学１年生時は，発達の基盤を身に付ける時期であることは言うまでもなく，幼児教育において獲得した話し言葉を自覚的に捉えながら書き言葉へと発達させていく段階であると考えられる。また，４歳から６歳は，構文習得が進む年齢であることが示されている（斉藤，2001；国立国語研究所，1977）。この時期の構文習得は，基礎的なリテラシーを発達させ，今後の育成される新たな価値を創造する力につながっていくと考えられる。

本単元においては，「を」の使い方の理解と使用や，「つくる」に関する動詞の習得，文や文章の中で語（「つくる」に関する動詞）と語（その対象となる「を格」）との関係を確かめたり，記述したりすることが基礎的リテラシーを発達させることにつながると考えた。

そこで，意を適切に表現するために，対象を表す「を格」を使用して「つくる」に関する他動詞を修飾することを活用しながら，一文の意味が明確になるように語と語との続き方を考えたり記述したり，確かめたりする子供の姿（FIGURE１）を目指したい。

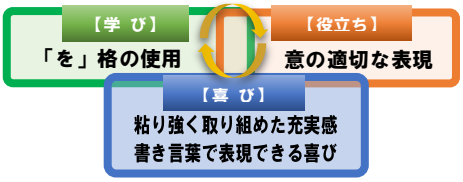

FIGURE1　本単元で目指す子供の姿

３ 研究仮説

意を適切に表現するために，対象を表す「を格」を使用して「つくる」に関する他動詞を修飾することを活用しながら，一文の意味が明確になるように語と語との続き方を考えたり記述したり，確かめたりする子供の姿を目指す。そのために，「お弁当のおかず」作りを説明する手続き的説明文を産出させることにした。「お弁当のおかず」作りを説明する手続き的説明文は，粘土を丸めたり，伸ばしたりするなどの手続きを説明することから，宣言的説明文や創作文に比べて，「つくる」に関する他動詞を多く使用する傾向にある。そのため，手続き的説明文で文意を明確に伝えるためには，対象を表す「を格」を使用する必要がある。そこで，研究仮説を以下のとおりに設定した。

研究仮説

図画工作科における「ごちそうパーティーをはじめよう」において作った「お弁当のおかず」の作り方を説明する手続き的説明文を書くことを通じて，「つくる」や「つくる」に関する他動詞とその対象を表す「を格」の使用する必要性が生まれ，「を格」の使用によって一文の意味を明確にして書くことができる。

４ 研究のデザイン

構文能力の調査（付記（２））

「つくる」に関する動詞と「を格」の使用実態の調査

（１）他動詞構文１（～が～を～する）
（２）他動詞構文２（～が～で～を～する）
（３）他動詞構文３（～が～を～する）（「つくる」に関する他動詞構文）

「書き言葉」につながる遊びや生活

図画工作科「ごちそうパーティーをしよう」造形遊び（付記（３））

目標：粘土に十分に慣れるとともに，並べたり，つないだり，積んだりするなど手や体全体の感覚などを働かせ，活動を工夫してつくること。

例：並べる，つなぐ，積む，重ねる，かぶせる，丸める，破る，巻く，など

文意を明確にして記述するための他動詞と「を格」の使用

国語科「を～ごちそうレシピを書こう～」Ｂ書くこと

目標：目標：「を」の使い方を理解して文や文章の中で使うとともに，事柄の順序に沿って，簡単な構成を考えたり，一文の意味が明確になるように語と語の続き方を考えて，繰り返し記述したり，進んで確かめたりすることができる。

例：ねんどを丸めて，３つ並べてから，つまようじをさします。

「書き言葉」につながる遊びや生活　**造形の技能の習得と既習の技能の向上，**
「つくる」に関する動詞と「を」の使用の理解

図画工作科「ごちそうパーティーをしよう」造形遊び

目標：粘土に十分に慣れるとともに，並べたり，つないだり，積んだりするなど手や体全体の感覚などを働かせ，活動を工夫してつくること。

例：並べる，つなぐ，積む，重ねる，かぶせる，丸める，破る，巻く，など

構文能力の調査（付記（２））

「つくる」に関する動詞と「を格」の使用実態の調査

（１）他動詞構文１（～が～を～する）
（２）他動詞構文２（～が～で～を～する）
（３）他動詞構文３（～が～を～する）

調査

量的調査
「を格」と他動詞の使用数

質的調査
使用動詞の種類
誤使用の傾向

比較

量的分析
「を格」の使用
得点のＴ検定

質的分析
使用動詞の種類
誤使用の傾向

5 単元の目標

「を」の使い方を理解して文や文章の中で使うとともに，事柄の順序に沿って，簡単な構成を考えたり，一文の意味が明確になるように語と語の続き方を考えて，繰り返し記述したり，進んで確かめたりすることができる。

6 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
〔言葉の使い方〕 「を」の使い方を理解して文や文章の中で使うことができている。 ＊記述 **〔情報と情報との関係〕** 事柄の順序について理解したり表現したりする上で大切であることを理解している。＊記述	**〔構成〕** 事柄の順序に沿って，簡単な構成を考えている。＊記述 **〔記述〕** 一文の意味が明確になるように語と語の続き方を考えて記述している。 ＊記述 **〔推敲〕** 語と語との続き方を確かめている。 ＊行動観察	**〔粘り強さ〕** 繰り返し記述している。 ＊行動観察 **〔意欲〕** 文意を伝えようと進んで確かめている。＊行動観察

7 単元構成（全 6 時間）

単元の導入時において，図画工作科では，「ごちそうパーティーをはじめよう」を実施する。図画工作科では，「丸める」「伸ばす」「まく」等の技能の習得を図る。国語科では，「ごちそうレシピをかこう」において，作ったごちそうを友達に説明する文章を書くという課題を設定する。

単元の展開時においては，作ったごちそうを基にしながら，「おかず」の作り方を説明する手続きを説明する文章を書く。

単元の終末時においては，「おかず」の写真と作り方を共有し，図画工作科において，再びごちそうを作るとともにパーティーをする。

時	○　学習活動と子供の姿	★　教師の関わり	評価
図工	○　「ごちそうパーティーはじめよう」において，「お弁当のおかず」を作る。	★　「丸める」「伸ばす」「まく」「ねじる」などの技能の習得を図る。	
1	○　「おかず」の作り方を説明する文章を書くという課題を設定するとともに，モデル文を読み，内容を把握する。 ○　自分が作った「お弁当のおかず」の写真を見て，書く内容を確かめる。 ○　確かめた内容を基にして，「始め」を書く。	★　本にして読み合うことを伝える。	〔意欲〕
2 3	○　作ったおかずの順序に沿って，簡単な構成を考える。 ○　考えた簡単な構成を基にして「中」と「終わり」を書く。		〔構成〕 〔情報と情報との関係〕 〔記述〕
4 (本時)	○　書いた文章を読み返し，「を」の使用を確かめたり，書いたりする。	★　「を格」が欠如した文章を示す。 ★　「を」を「お」と表記する。	〔言葉の使い方〕 〔推敲〕 〔意欲〕
5	○　確かめた文章を基にして，文章を書く。		〔粘り強さ〕
6	○　友達が書いた文章を読み，感想を伝える。		
図工	○　友達が書いた文章を読みながら，粘土で「ごちそう」を作る。		

８ 本時案（４／６時間）

本時の目標

一文の意味が明確になるように語と語の続き方を考えながら，「を」の使い方を確かめたり，書いたりすることができる。

【前時まで】

確かめた内容を基にして「中」と「終わり」を書いている。

○ 学習活動や子供の姿	評価	★教師の関わり
○ 教師１が作った「お弁当のおかず」の写真を見る。 ・ 先生は，どのように，だんごをつくったと思いますか。 粘土を丸めた。／3こ丸めた。／つまようじをさした。		★ 児童の発言から，他動詞「丸めた」「さした」を取り上げ，確認する。
○ 教師２がだんごを作っている動画を見る。 え？どうしてそうなるの？／教師2がうまく作ってくれていない。／教師1がうまく書けていないのかも。		★ 動画の内容 ・ 紙を丸めてから，粘土であったことに気づく。 ・ 竹ぐしではなく，ピックをさす。 ・ ミートボールと発言する。
○ めあてを設定する。 **先生のぶんしょうをなおして，じぶんの文しょうもたしかめよう。**		
○ 教師２が間違ったところは，どこですか？ 紙を丸めた。／ピックをさした。／ミートボールを作った。		
○ 教師２は，どうして間違ったのでしょうか。 粘土とわからなかったから。／何をさすか分からなかったから。／何を作ったか分からなかったから。		
○ 例文を読む。 ・ 教師２に，だんごを作ってもらうためには，この文をどのように直すとよいですか。 ねんどって書けばいい。／「ねんどを」って書いたらいい。／「ねんどを」って書かないと何を丸めるか分からない。 だんごって書けばいい。／「だんごを」って書いたらいい。／「だんごを」って書かないと何を丸めるか分からない。		★ 「を格」を抜いた例文を示す。
・ では，この文は，どのように直すとよいですか。 「ねんどを」って書けばいい。／「くしを」って書かないと分からない。／「何を」丸めて，「何を」つくったのかを書かない分からないよ。		★ 児童が「ねんど，だんごって書けばいい」と発言した場合には，「を」を抜いて例文に書き加える。
○ 対象を書き表すことで，一文の意味が明確になることを理解する。		
○ 「お」ではなく，「を」と書くことを理解する。 ・ これでよいですね。 よくない。／「お」ではない。／「を」と書く。 **なにを まるめたり，つくったりするかを かく。「お」では なく，「を」と かく。**		★ 「ねんどお」「だんごお」と表記する。
○ 読み返したり，読み合ったりして，「を」の使用を確かめる。 「を」が書けていた。「を」が書けていなかった。／「何を」が書けていた。／これなら，友達にも作ってもらえると思う。 「を」の使い方を理解して，文の中で使うことができている。 一文の意味が明確になるように語と語の続き方を確かめたり記述したりしている。		★ 「を」の使用の視点から読み返したり，読み合ったりさせる。
○ 「を」使って一文の意味が明確になったことを確かめる。 ・ 「ごちそうの作り方」がよく分かる文章を書くことができましたね。		★ 「を格」の欠如の修正，「を」の欠如の修正，「お」の修正を取り上げる。

文献

伊藤友彦（1996）格付与および動詞句に関する幼児の統語知識：名詞句・格助詞の脱落・挿入現象をてがかりとして．東京学芸大学紀要１部門，47，139-142.

神常雄・野村妙子（2002）小学校低学年児童における構文の理解と産出能力．岩手大学教育学部研究年報，61（２）73-88.

国立国語研究所（1977）幼児の文法能力，国立国語研究所報，58.

森川拓也（2018）領域「言葉」から「小学校国語科」への展開についての考察：幼保小接続の観点から，桜花学園大学保育学部研究紀要，17，175-191.

文部科学省（2018）小学校学習指導要領解説国語編，東洋館出版.

OECD（2019）Learning Compass Concept Notes （http://www.oecd.org/education/2030-progect/contact/）.

斉藤佐和子（2001）健常児の構文能力：格助詞の表出．小児保健研究 60（２），358-365.

白井俊（2020）Education2030 プロジェクトが描く教育の未来：エージェンシー，資質・能力とカリキュラム．ミネルヴァ書房.